



Title	『源氏物語』に描かれた男踏歌での饗応過差：紐帯 深化のための戦術として
Author(s)	前田, 恵里
Citation	詞林. 2017, 61, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60675">https://doi.org/10.18910/60675</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『源氏物語』に描かれた男踏歌での饗応過差

——紐帯深化のための戦術として——

前田 恵里

はじめに

『源氏物語』に描かれた華やかな宴とそこでの贈り物の品々は、私たちに豪奢で煌びやかな平安貴族の生活を想像させる。マルセル・モースの『贈与論』では、財産や富、動産や不動産といった経済的有用性を持つものだけでなく、礼儀、饗宴、舞踏、祭礼なども贈与交換の対象になると指摘されている。また、モースは贈与交換では贈る義務、受領する義務、返礼の義務の三つの義務が存在し、返礼は最初の贈与と等しくなければならぬとした。

モースの理論を念頭に置いて、撰関期古記録類に記された贈与交換（饗宴を含む）を見てみると、「過差」という言葉が目にとまる。過差とは、度を越して華美であったり、ぜいたくであったりすることを意味するため、「過差」の発生した贈与では、最初の贈与者の持つ大きな経済力により、受贈者は同価値の返礼が難しい状態に置かれてしまうとと言える。つ

まり、両者の間に力の差が生じ、贈与者は受贈者より社会的優位に立つ。贈与交換における過差が貴族たちの力関係を生み出すのである。したがって、「過差」に注目して『源氏物語』を捉えることは、光源氏を始めとした、物語に登場する貴族たちの関係を可視化する上で意義があると言えよう。そして、本稿では、『源氏物語』の数ある宴の中でも男踏歌での饗応に注目したい。

男踏歌とは正月に行われる宮廷行事の一つで、男性官人が天皇御前、貴族の邸をまわり、歌舞を披露した。『源氏物語』では、初音巻、真木柱巻、竹河巻に描かれるが、このうち初音巻六条院での男踏歌、真木柱巻尚侍玉鬘の局での男踏歌に「水駅」という言葉が共通して確認できるのは注目すべきことである。次に各々を引用する。

朱雀院の後の宮の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、①水駅にて事そがせたまふべきを、例

あることよりほかに、さまことに事加へていみじくもてはやさせたまふ。22（初音巻③一五八、九頁）

みな同じごとくかづけわたす綿のさまも、にほひことらうらうじうしないたまひて、23こなたは水駅なりけれど、けはひにぎははしく、人々心げさうしそして、限りある御饗応などのことどももしたるさま、ことに用意ありてなむ大将殿せさせたまへりける。（真木柱巻③三八三頁）

初音巻では、傍線部①のように、六条院の主・光源氏が「水駅」に「事加へ」た、しきたり以上の饗応で踏歌の一行をもてなしたとある。水駅とは、男踏歌で、酒・湯漬を供して簡略な接待をする場所のことである。他方、真木柱巻では、宮中の玉鬘の局が水駅を担当するが、傍線部②に、玉鬘の夫・鬚黒が特別な注意を払って饗応のしきたりについて指示を行っているため、実質的な接待役は鬚黒と言えるだろう。そして、そのもてなしは、「けはひにぎははしく、人々心げさうしそし」た、にぎやかな雰囲気と局の人々の心繕いとに満ちたものだったという。

右に引用した二つの男踏歌には、簡単なもので十分なはずの水駅の饗応を盛大に行うという共通点が見られる。しかし、先行研究は、これを「家の力を示す」とするだけで、六条院から玉鬘への水駅の移動に六条院の栄華喪失を読み解くこと

に熱心である。24しかし、この二つの饗応を過差と見なした時、単なる力の誇示ではない、光源氏と鬚黒の巧妙な政治戦術が浮かび上がるのである。

#### 一、藤原公任による饗応過差

まず、饗応過差というものがいかなる背景と機能を持つのか、古記録類に見られる例を挙げて考察したい。

長和元年（1012）四月二十七日、道長男教通と藤原公任女の婚儀が行われた。『小右記』には、翌日二十八日に婿の教通から公任女の許に消息があり、それを届けた後朝使に対して勸盃があつたと記される。

今朝依四条大納言消息、資平詣向太皇太后宮、於件宮西对、去夜行婚礼、女十三、後朝使右衛門佐輔公、以高麗端盤

子所申遣也、為勸盃酒之垣下所招也云々、内御使外招四位已上為恒下、必不可然事、（中略）一家無過差、今有此事、計之有後悔歟。

実資の養子資平（当時従四位下）は、相伴役の垣下を務めるよう公任から依頼されたのだが、そのことについて実資は、傍線部の通り「過差」だと非難し、「天皇の後朝使が正客という訳でもないのに四位以上の者を垣下とするなど良くないことである。公任の一族では今まで過差というものは無かつたが、今回はそれがあつた。推察するに後悔することがあつたのか。」と述べる。

実資の考えた公任の「後悔」とは一体何なのか。それは同時代の平安貴族たちの姿から窺い知れる。先に述べたように、贈与交換における過差は、受贈者を贈与者より劣位に置いたため、受贈者が贈与者と対等な力関係を望む場合、同価値の返礼を行わなければならない。したがって、過差が大きければ大きいほど、返礼の価値は釣り上がっていくこととなる。また、贈与者がそれだけ多くの財を費やしたことが一目瞭然なので、受贈者の歓心を得ることも繋がる。

これを藤原道長を取り巻く貴族らは上手く利用した。藤原顕光は、道長から賀茂社参詣の前駆として遣わされた頼通に馬二疋と劔、その従者に綾一疋、隨身等には絹二疋を与え、実資に「この過差は右大臣の礼としては行き過ぎだ」と道長への追従を読みとられた。また、寛仁三年（1019）の賀茂祭では諸使が道長・頼通の隨身に莫大な量の禄を与えている。いずれの場合も、贈与過差を通じて、道長らの歓心を買ひ、その返礼として授けられる利益の最大化を図ったと考えられる。

このことが、公任の後悔を露わにする。公任は故実家にふさわしく「無過差」を通してきたために、過差を好む貴族たちに比べ道長からの便宜を受けられずにいた。そのことを教通と自らの娘の婚儀に際して悔やんだのではなからうか。

実際、「正二位」に昇叙し、藤原斉信と肩を並べるといふ公任の望みを実現するためには、道長の助力が必要不可欠

だった。当時二人は共に権大納言の官職を得ていたが、位階に関しては斉信が正二位であった一方、公任は寛弘三年（1006）以降従二位に留まっていた。斉信は中宮彰子、春宮敦成、中宮威子など道長近親者の家政機関に奉仕するなど、寛弘の四納言（斉信、公任、俊賢、行成）の中で道長の信頼が最も深かった。このような斉信を、公任は苦々しく思っていたらしく、寛弘元年（1004）に斉信が自らに先んじて従二位に昇った際には出仕を拒否、その翌年七月二日には上表文を提出したほどである。したがって、長和元年の頃、公任は斉信への強い対抗心から彼と同じ正二位を望んでいたと考えられる。だからこそ、公任は教通と娘の婚礼に期待をかけていたのだらう。この氣勢が、過差となって表されたのではなからうか。すなわち、教通の後朝使を慣例以上にうやうやしく厚遇することで、その主たる道長一族の心を掴み、彼らから与えられる利益を増大させる。これは、婚姻による関係強化と相俟って、公任への政治的後援を一層大きなものにしたと考えられる。

公任はこの婚礼のおよそ半年後の十二月二十二日、婿の教通に譲られて念願の正二位に昇った。彼の場合、饗応過差は、期待通りの結果をもたらしたと言えるよう。

後に、藤原斉信も、治安元年（1021）に行われた自身の娘と道長男長家との婚儀の翌日、公任と同じ過差による歓待を長家の使者に与えている。この時期、斉信は大臣就任を切望

していたらしく、寛仁三年（1019）、治安三年（1023）の二度にわたって齊信が大臣の座を狙っているという噂が立っている。よって、婿の長家を介して道長一族からそのための助力を得たかったと考えられる。しかし、齊信の場合、治安元年に左大臣頼通、右大臣実質、内大臣教通の体制が成立して以降大臣ポストに空席がでなかったことなどから、そう上手くは事が運ばず、大納言に留まった。

このように、使者に対する饗応過差は、饗応者が使者の心の心を掌握し、紐帯を深めるために用いられたのだった。

## 二、光源氏による饗応過差

公任に見られた人心掌握と紐帯深化の意思は、初音巻で「事加へ」た饗応を催した光源氏にも読み取れる。

そもそも、その対象が男踏歌一行であることが示唆に富む。男踏歌と同様、初音巻に描かれた正月儀礼で、公卿や親王らが残り無く参上した臨時客では、「引出物、祿など二なし」とあるだけで、「事加へ」たもてなしの様子は確認できない。男踏歌を臨時客と対照すれば、踏歌の人々が最も歓待を受けている印象を受ける。

これには、男踏歌一行に内大臣家の子息らが加わっていることが関係すると考える。初音巻の男踏歌では、「殿の中將の君、内の大殿の君たち、そこらにすぐれて、めやすく華やかなり」（初音巻③一五九頁）とあるように、饗応者源氏の子

である夕霧と並んで、内大臣家の子息たちが一行の中で抜きんでた存在として描かれる。彼らを歓待し、内大臣家との結びつきを強めることこそ、水駅での饗応過差の目的であったのではないか。

濔標巻以後、源氏には権力志向の「策謀家」という側面が見られるようになるが、その中で他者との協調は不可欠であった。田坂憲二氏によると、冷泉朝における源氏の「春宮接近と弘徽殿太后に対する好遇」は、旧右大臣派及び鬚黒一族の懐柔を狙う勢力拡大策であるという。氏の指摘は、濔標巻での源氏を取り巻く政治状況を念頭に置いたものだが、このような人脈作りは初音巻でも依然として重要であると考えられる。少女巻での梅壺女御立后を「世の人ゆるしきこえず」（少女巻③三一頁）とあるから、むしろ緩やかに構築しつつあった連携体制に衝撃が走ったと言える。太政大臣に昇り、執政の地位から降りた源氏であるけれど、濔標巻で語られた明石姫君が后、夕霧は太政大臣に昇るといふ予言を実現させるためには、自らの権力をできるだけ長期化し、盤石にしなければならぬのである。

そこで、源氏の考え出した策が、玉鬘を媒介とした関係の緊密化だった。玉鬘を「ものくさはひ」（玉鬘巻③一三一頁）として引き取り、六条院に気兼ねなく出入りし、源氏と協力関係を結ぶ者たちを求婚させる。そして、そのうちのいずれかを玉鬘の婿として迎えれば、姻戚関係というより強固な結

びつきの獲得が可能になる。<sup>16)</sup>

しかし、この結婚を介した他家との紐帯深化策は、源氏に次ぐ第二勢力、内大臣家へは一切対応できないという欠点も持ち合わせている。内大臣の子息たちは最も位の高い柏木ですら未だ中将に留まり、何より玉鬘とは異母兄弟の關係にあるため、婚候補であり得るはずがない。すなわち、今回の計画対象からは完全に排除される。けれども、梅壺立后問題、雲居雁と夕霧をめぐる問題をきっかけに、源氏と内大臣との間に対立感情が生まれたことで、内大臣家との結びつきは弱まっており、早急に何らかの策を講じる必要がある。

そこで、浮上したのが水駅での過差という手段である。内大臣家の若者らを今のうちに抱きこみ、次代における彼らとの協調關係を確実なものにすると同時に、自分と内大臣との摩擦緩和の潤滑油として働かせる。このような期待を胸に、饗応を行ったのではなからうか。

また、「殿上人など、物の上手多かるころほひにて、笛の音もいとおもしろく吹きたてて」とあるように、踏歌の人々として殿上人が確認できるのも注目し得る。九世紀半ばから十世紀にかけて、諸官人による官司關係者への饗応過差が盛んに行われた。これは過差によつて下級官人からの「衆望」獲得し、彼らとの疑似主従關係の形成を試みた結果であった。この過差による主従關係形成を、源氏は殿上人との間で構築しようとしたと思われる。

この頃源氏は太政大臣で形式上は太政官の頂点にある。その一方、殿上人は四位、五位の天皇の側近たちであり、公卿、親王らに比べ、直接影響力を持つという訳ではない。しかし、彼らは未来の公卿候補なので、今のうちに支配―被支配關係を確認しておくことは、長期的な権力保持を目指す上で極めて有効であろう。

以上のように、初音巻の光源氏は、水駅の饗応過差により内大臣家、殿上人との關係強化を図ることで、長期権力の実現を目指していたと考えられる。このような源氏の姿勢は、彼の度々漏らす出家願望と相反するように一見思われるが、「末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思しめすにぞ、とく棄てたまはむことは難げなる」（絵合巻②三九二、三頁）とあるように、「末の君たち」、夕霧、明石姫君の将来に関する不安こそ出家の妨げなのである。濡標巻以後の源氏にとつて、自家の権勢拡充への意志と出家願望は一对ということだろう。<sup>17)</sup>

### 三、鬚黒による饗応過差

初音巻における源氏の過差は権力の長期化を目指したものであったが、真木柱巻の鬚黒はどうであろうか。

鬚黒の場合、過差の背景には玉鬘との結婚による政治勢力図の変化がある。現春宮の外戚として将来政権を担うことが確実な鬚黒との姻戚關係成立は、玉鬘の養父源氏、実父内大

臣の両者にとって、決して悪いものではない。実際、源氏は「誰も誰もかくゆるしそめたまへることなれば」(真木柱卷③三五〇頁)と二人の婚儀をまたとないほど立派に行っており、かねてから鬚黒を「朝廷の御後見となるべかめる下形」(藤袴卷③三四二頁)と評し、その将来性に魅力を感じていた内大臣は、宮仕えに出るよりこちらの方が無難だと喜んでゐる。このように、鬚黒と玉鬘の結婚は、源氏、内大臣、鬚黒三者の権力を補完する可能性を持つものだった。しかし、その一方で、既存の鬚黒と式部卿宮の姻戚関係には大きな亀裂が生じてしまった。

玉鬘に夢中となり、ますます娘・北の方を顧みなくなる鬚黒に、式部卿宮はこれ以上の辛抱は「いと面なう人笑へなること」(真木柱卷③三七〇頁)だと怒り、半ば強引に娘北の方を引き取った。あわてて式部卿宮を訪れた鬚黒だが、冷たく追い返され、両家の姻戚関係は修復不可能な状態になってしまった。

この式部卿宮家との関係断絶は、鬚黒に大きな損失を与えたと考えられる。鬚黒一族は右大臣家、式部卿宮家などの他家と連帯し、宮廷社会における第三勢力としての権力を保持してきた。このような戦略をとる者にとって、その協力関係解消は痛手であろう。それゆえ、鬚黒にはここに来て式部卿宮家に代わる新たな存在と強固な結びつきを獲得する必要性が生じたと言える。そして、その対象となったのが内大臣家

であり、その獲得手段こそ鬚黒が実質的主権者であった男踏歌の饗応だと考える。

ほのほのとをかしき朝ばらけに、いたく酔ひ乱れたるさまして、竹河うたひけるほどを見れば、内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、容貌きよげにうちつづきたまへる、いとめでたし。童なる八郎君はむかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並びたるを、尚侍の君も他人と見たまはねば、御目とまりけり。

(真木柱卷③三八二、三三頁)

右は、男踏歌一行の竹河を謡う様子を玉鬘が見る場面の記述であるが、傍線部から玉鬘の異母兄弟にあたる内大臣家子息たち、その中でも特に父の寵愛を受ける八男、そして玉鬘の夫・鬚黒の長男が記され、彼らが踏歌一行に加わっていることがわかる。すなわち、玉鬘を媒介としてつながる内大臣家と鬚黒一族の若者たちが饗応の対象なのである。このことから、鬚黒は、両家の未来を担う若者たちを過差によつてもてなし、彼らの心をつかむことで次世代にわたる両家の紐帯を得ようとしたと考える。そして、それを通じて一族の活路を開こうとした。

また、一族の活路という点では、鬚黒の嫡男で先ほどの引用文にも見えた「大将殿の太郎君」と、源氏・内大臣が背後に控える玉鬘とを結びつかせ、彼の昇進の糸口をつくらうと

したとも考えられる。

なかなか、男君たちは、え避らず参で通ひ見えたてまつらんに、人の心とどめたまふべくもあらず、はしたなうてこそ漂はめ。宮のおはせんほど、型のやうにまじらひをすとも、かの大臣たちの御心にかかれる世にて、かく心おくべきわたりぞとさすがに知られて、人にもなり立たむこと難し。

（真木柱巻③三二二頁）

そもそも、この太郎君は、もとの北の方所生で、彼女が式部卿宮邸へ移る際、その行く末を案じた子である。彼女は、傍線部で、夫が彼らの将来を気遣つてくれるとは思えず、源氏と内大臣に目の敵にされたままでは出世するのは難しいだろうと思案しており、自分の息子らは式部卿宮方にいる限り、権門にふさわしい地位を得られないという認識を持つ。この認識は鬚黒自身ももちろん共有していただろうし、たとえいざれ自分が政権を獲得したとしても、子孫が振るわなければ鬚黒一族の権力保持は厳しいものとなるため、鬚黒も無視はできなかったと考えられる。だからこそ、玉鬘の局で行われる饗宴を盛大に催し、新しく母となった玉鬘に好印象を抱かせ、源氏と内大臣という強力な後見を持つ彼女と太郎君とを結びつけようと試みたのではないか。

そして、実際の企ては功を奏する。男踏歌後、鬚黒の息子たちは姉・真木柱に、「まろらをも、らうたくなつかしうなんしたまふ。明け暮れをかしきことを好みてものしたまふ」

（真木柱巻③三九六、七頁）と玉鬘に対する好感を語っている。また、同じく男踏歌後、玉鬘が鬚黒の子を出産し、鬚黒にこの上なくかしづかれる様子を、内大臣は「おのづから思ふやうなる御宿世」（真木柱巻③三九七頁）だと評した。先述のように、内大臣は春宮の外戚である鬚黒に有用性を感じており、玉鬘のためにも内大臣家のためにも婚として最適だとみなしていた。その上、その鬚黒との子を玉鬘が産んだことで、玉鬘の幸福と鬚黒一族との一層強固な繋がりがとが実現したため、「おのづから思ふやうなる」と感じたのだろう。

以上のことから、鬚黒は式部卿宮家との協力関係解消により、窮地に立たされた一族の権益を保持するため、男踏歌の「水駅」を利用した。すなわち、玉鬘の局で過差の発生した饗応を催し、自らの息子と内大臣家の子息らをもてなすことで、式部卿宮家との関係に代わる、内大臣家との新たな協力関係の強化と一族の未来における繁栄を図ったと考える。

おわりに

本稿では、初音巻と真木柱巻に描かれた「男踏歌」饗応における過差に注目し、それらが他勢力との紐帯を深めるためのものであったことを明らかにした。光源氏の場合も、鬚黒の場合も、ただ単に家の権勢を示そうとしたのではなく、自らの権力を長期化、拡大するための一種の戦術として過差を用いている。私たちはそこに、実際の平安宮廷社会において何

とか栄華を掴みとろうと、懸命に生きた貴族たちの面影を見出すことができる。

注

- (1) 『日本国語大辞典第二版』（小学館 二〇〇一年）参照
- (2) 以下、『源氏物語』本文の引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）による。
- (3) 山中裕「六条院と年中行事」（秋山虔・木村正中・清水好子編『講座 源氏物語の世界 第五集』有斐閣 一九八一年）、山田利博「男踏歌の対照」（『源氏物語の構造研究』新典社 二〇〇四年 初出『中古文学論攷』一九九八年十月）
- (4) 『小右記』長和元年四月二十八日条  
なお、以下『小右記』の引用は『大日本古記録 小右記』（岩波書店）による。
- (5) 『栄花物語』では、藤原道長が贈与過差を用いて人心掌握の様子を確認できる。小一条院敦明親王と娘寛子の露頭の儀（巻第十三ゆふしで）において、道長は小一条院の従者への禄を、「例の作法にいますこし増させたまへり」（『新編日本古典文学全集 栄花物語』②一二二頁）とあり、しきたりの作法にもう一段上乘せした禄を与えたことが描かれている。小一条院の春宮退位を受けて、道長への不満を募らせる小一条院周囲の懐柔を試みたのだろうか。
- (6) 『小右記』寛弘二年四月十九日条
- (7) 『小右記』寛仁三年四月二十三日条
- (8) 関口力「藤原斉信」（『撰関時代文化史研究』思文閣出版 二

〇〇七年）

- (9) 『小右記』長和元年四月二十六日条には、公任がこの婚儀に先立ち実資から装束を借りたことが記されており、その期待の大きさが感じられる。
- (10) 『公卿補任』長和元年条
- (11) 『小右記』治安元年十月二十八日条
- (12) 関口氏注8論文。
- (13) 『小右記』寛仁三年六月十九日条、治安三年九月十七日条
- (14) 伊藤博「滯標」以後「光源氏の変貌」（『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院 一九九四年 初出『日本文学』第一四巻第六号 一九六五年六月号）
- (15) 田坂憲二「内大臣光源氏をめぐって―源氏物語における（政治の季節）・その三」（『源氏物語の人物と構想』和泉書院 一九九三年 初出 王朝物語研究会編『論集 源氏物語とその前後 2』新典社 一九九一年）
- (16) 藤袴巻で、源氏の弟蛭兵部卿官、式部卿官家の子息左兵衛督、鬚黒の三人が最終的な玉鬘の婚候補として残った。彼らは源氏が今後も良好な関係を保つべき勢力の筆頭格であるという共通性を持つ。鬚黒は春宮の外戚でいずれ上卿になることが確実であり、式部卿官家はその鬚黒と姻戚関係にあり、当帝の外戚でもある。そして、蛭兵部卿官は、「兵部卿」の官職を得ており、かつて旧右大臣家と姻戚関係にあったところを見ると、式部卿官に次ぐ第二の親王だと考えられる。したがって、この三人のとの姻戚関係構築は、いずれの場合も源氏の権力強化に有効であると言える。
- (17) 遠藤基郎「過差の権力論 貴族社会的文化様式と徳治主義イデオロギーのはざま」（服藤早苗編『王朝の権力と表象―学芸

- の文化史』森話社 一九九八年）
- (18) 高木和子「光源氏の出家願望―『源氏物語』の力学として―」  
『源氏物語の思考』風間書房 二〇〇二年 初出 『日本文芸研  
究』第五一卷第三号 一九九九年十二月）
- (19) 田坂憲二「鬚黒一族と式部卿宮家―源氏物語における〈政治  
の季節〉・その二―」（注15に同じ） 初出 源氏物語研究会編『源  
氏物語の探究 第十五輯』風間書房 一九九〇年）

（まえだ・えり 京都大学事務職員）